

巻頭言

国文学科が閉鎖されて一年、なんとか学会を維持し、学会四〇周年の記念号を発行することができた。これも皆学会員の方々の励ましに支えられてのことである。就中、かつて親和の専任教員であった諸氏には、この号への寄稿を快く引き受けくださり、お礼の申し上げようもない。おかげをもって、実り豊かな記念号となった。

お詫び申し上げたいことがある。それは、このようなさまざまな方のお気持ちに支えられた中で、現在の専任教員が牽引車たりえなかったことである。講演会もしよう、ホームページも立ち上げよう、総合文化学科の日本語日本文学コースの学生をもっと学会に勧誘しようという計画はしていたが、何もできなかった。昨今の私立女子大学の事情を反映して学生募集などの仕事に忙殺されて、国文学会の仕事にまで手が回りかねる状況だったのである。

結局、成果はただ一つ、この『親和國文』のみである。学科が閉鎖された後の学会について、見守り期待してくださった学会員の皆様には申し訳なく思っている。

悲しい出来事もあった。我々の近しい先輩である櫻井武次郎名誉教授が、平成十九年一月二十二日に逝去されたことである。櫻井教授は、病のため一年早く退職されたが、その後も当学会には色々ご配慮下さった。私は、昨年三月国文学科閉鎖の後にお見舞いにかがったが、教授は病床で身体のごきまままならぬ中で、学会のこと、新しい学科のことについて力強いアドバイスを下さった。教授はこの号にも寄稿いただいているが、一月に家族の方から原稿の校正が無理である旨うかがい、心配していた折、訃報に接したのである。この号の論文がはからずも遺稿となってしまった。故人の冥福をお祈りしたい。

学科という裏づけない学会を運営することの厳しさを思い知らされた一年であった。しかしながら、学会を存続させるということは、少なくとも私にとっては、当たり前のことである。多くの卒業生が社会で活躍し、我々は

親和を研究・教育の拠点とし、また、日本語日本文学の研究を志す学生がいるのだから。

この『親和國文』も、天空に輝いて人々を導く星にはなれないにしても、自分の道を歩む人々に、「あそこにも人がいて日々勤しんでいるのだ」と知らせ励ます荒野の灯火でありたいと思う。

(国語国文学会長 近藤要司)